しら、ふしぎね、とだけ言っておいた。(四)窓に近くバケツにくんで置いた水に日が當って壁に丸いかげをうつしてゐる。みつけた子どもがおばけだといふ。何だらうといふわけで原因をみつける。手をかざして丸いかげをさへぎづたり、水をうごかしてみたりする。持合せの鏡をもつてきてうつしてみせたりした。なぜかといふことは一切こちらからは言はないことにした。疑問をもつ態度、その疑問を解き度い、解かうといふ態度を先生がまづ持つことにして。(五)これは小さな光學である。よくすることでもあるがおべんたうの時お箸をお湯のみに入れて折れたと言ふ。出してみて直つた、ほらね、と何度もやつてゐる子ども。先生も一しよにやつてみる。ごはんをいたゞくのがそつちのけにならない程度に。そしてどうしてかしら、とまづ先生が疑問にした。

風

二百十日二百二十日を控へた九月は風が吹く日が多い。今日は風がひどい、あのお庭の木の太いところまでゆれてゐる。今日は割合に靜か、あの木の枝だけゆれてゐる。これは風の強さである。日の丸の旗がはた〳〵と鳴つてゐる。今日はあちらの方から風が吹いてくるのね、あそこの煙も同じ方に行く、とこれは風の方向。これなどは何度も度々に機會ある毎に注意することにし度い。

談話

志村貞子

今月に豫定されてゐるお話は、夏休中のいろ〳〵の話、二百十日の話、魔法の泉、三羽のひよこ、鳴かない鈴蟲、月の井戸、やどかり、一寸法師、一本足の兵隊、夏から秋へ、秋季皇靈祭、黒のお客樣、傳書鳩のたより、小人の笛であります。紙面の都合でこゝには取捨致しますが、まだ〳〵殘暑の嚴しい時です、涼しいところで、靜かにお話を聞く機會を充分に與へてやつて下さい。

夏休中のいろいろの話　これは先生のお話と、子供達の過した夏休のお話との兩方を含みます。

夏休が終つて久しぶりに幼稚園に來た子供達が、先づ先生にお話するのは自分の夏休でせう。これはまた、先生も子供達から一番に聞きたいことです。從つてこれは、先生と一人一人の子供との間には、極めて自然に、隨時に話されますし、またそれでよいのであります。けれども六月の誘導保育、お話と唱歌の會に於けると同樣に、「發表の練習」「人の發表に對する態度」「共に樂しむ心」といふことを先生の念頭に置いて、一度みんなで集つて、子供達がそれ〴〵自分の夏休のことを、お友達にお話する會とまでゆかなくても、語りあひといふ程度のことをしたいものです。勿論この場合、先生は聞き手であると共に、語り手のよき援助者でもあります。

次に先生のお話、先生の過された夏休のお話も結構です。が、是非していたゞきたいのは、幼稚園の休の間に、子供達が樂しい夏を過してゐる間に、この國は如何に戰つたか、といふことであります。兵隊さん有難うの心から出るお話であります。

月の井戸　獣の村のお話です。日照がつゞいてどの井戸も涸れてしまつた中に、たゞ一つ、兎がお月樣からいたゞいた井戸だけは、冷い綺麗な水がどん〳〵湧き出てゐました。皆はそれぞれの身體にふさわしい容物を持つて、兎のところに水を貰ひにきてゐました。或日、象が來て勝手に井戸の中へ鼻を突込んで飲まうとしてきかないので皆で、「この井戸はお月樣からいたゞいた井戸だからそんなことをするとお月樣の罰があたる、そして水が濁つて惡い水になつてしまふ」といつてどうしても飲ませません。象は怒つて、「夜になつて皆がねてから飲みに來るぞ」といつて歸ります。兎はお月樣に、「夜になつて象が井戸を荒しに來たら追ひ返して下さい」とお願ひします。やがて丸いお月樣が昇つて、井戸の中にもまあるくうつりました。森から出て來た象は井戸をのぞき込んで丸い、光つたものがゐるのをみてびつくりします。鼻をつゝこむとすぐチラ〳〵と碎けて散り、鼻を拔くと又、丸く集ります。象はだん〳〵に氣味が惡くなつてたう〳〵逃げ出してしまひます。朝になると、兎は大喜びでお月樣に御禮を申上げて、またせつせと皆に冷いきれいな水を汲んであげた、といふお話です。考へればいろ〳〵深い意味を持つたお話ですが、話す時は淡々と話しませう。子供は子供なりに味つてゐますから。丁度お月見の頃にいゝお話です。

やどかり　これは當日本幼稚園協會から近く出版される幼稚園談話集の第二輯に載るお話であります。海邊のやどかりが、やどかりといふ名前がいやになつて、長い間借りてゐた貝殼にさやうならをして、自分の家を探しに出かけます。ところが蟹の穴に落ちて剪まれさうになつたり、他のやどかりの家にとびこんで鉢合せをして逃げ出したり、さん〴〵です。その中にさゞえの殼をみつけたやどかりはその立派なのに大喜びで中に入つてゆきます。ところがこの家は廣くていくら行つても突き當たるところまで行かないし、つかまる所もないし、あつちへころ〳〵、こつちへころころ、ころがつてしまひます。つく〴〵前のお家へ歸りたくなつたやどかりは、しく〳〵泣き出してしまひます。そこへ貝のお友達がやつてきて話をきゝ、皆で親切に始めの貝殼を探してきてくれました。やどかりは貝殼にごめんなさいをいつてまた前のお家に入るといふお話です。この話からも種々の寓意を考へることが出來ます。けれども話す時は、子供達に親しかつた夏の海邊の貝同志の可愛いゝお話でよいと思ひます。

一寸法師　既に子供達にお馴染深いお話です。このお話の項點は、打出の小槌で一寸法師が立派な男になるところですが、お椀の舟に箸の櫂で漕いでゆくところ、三條右大臣の玄關のところ、鬼とたゝかふところ等も子供の豐かな想像力を充分に樂しませ、喜ばせる點です。敍述は冗長にわたらず、しかも具體的に活き〳〵と話したいものです。子供達がよく親しんでゐる話だけに、話方によつてはやりにくいものとなり、又、他の話以上に樂しめる話にもなりませう。

傳書鳩のたより　田舍にゐる姉弟が野原で遊んでの歸りに一羽の鳩を捕へます。みると足に何かつけてゐるので取つてやります

と中からこんなお手紙が出て來ました。

「お友達へ

この手紙を受け取つた人は、又お返事を下さいませ。僕は東京にゐる子供です、今、幼稚園でこの手紙を書いて鳩につけて、とばします。この手紙がどんな方に屆くかわかりませんが、大きくなつたら東京に遊びにいらつしやい。又この鳩にお返事をつけて下さい」。

二人は大よろこびで鳩に御馳走してやり、こんな御返事をかきました。

「私達は田舍にゐる姉弟です。今日は鳩さんのお使で、お手紙ありがたうございます。うれしうございました。今に大きくなつたらば東京にまゐりますからお目にかゝりませう。あなたも田舍に遊びにいらつしやいませ」

お返事をもらつた鳩は嬉しさうに遠くにとんで行きました。といふ短いお話です。何となく物足りない感じも致しますが、それだけにまた發展性のあるお話だと思ひます。二回、三回とつゞけて東京と田舍の樣子をそれ〴〵御手紙で知らせることにしてもよし、又、傳書鳩のお話へと發展していつてもよいでせう。

小人の笛　これも談話集第二輯にのるお話です。兄弟もお友達もない三郎さんは、毎日ひとりでおもちやの舟を池に浮べて遊んでゐました。或日のこと何時ものやうにお舟を浮べて遊んでゐますと、どこからか可愛いゝ歌聲が聞えてきます。よくみるとお池の舟に小人が三人乘つて歌を唱つてゐるのでした。三郎さんが感心して聞いてゐる中に、小人達は今度は小さな笛を出して吹き始めました。あんまり上手なので、三郎さんは「君達、なか〳〵笛が上手ですね」と聲をかけます。

それから小人とお友達になつた三郎さんはお舟にのつてお池の底の小人の家へ遊びにゆき、澤山の小人達と鬼ごつこや戰爭ごつこをして、本當に愉快に遊びます。そして小さい笛をお土產に貰つて歸ります。その笛をよく見ると、「お友達の出る笛」と書いてありました。三郎さんは大變喜んでその笛を吹きますと、小人のお友達が澤山出て來ました。それから三郎さんは毎日この小人たちと樂しく遊んだといふお話です。本當に可愛いゝ、優しい心持に滿ちた、そして子供達の豐かな想像力を充分樂しませるよいお話だと思ひます。「お友達の出る笛」をもらつた三郎さんになつたつもりで嬉しく樂しく話したいものです。お友達の有難さ、お友達と一しよに遊ぶ樂しさ等は殊更にいはずとも子供達が自ら感じてくれることゝ思ひます。

二百十日の話、夏から秋への話は、夏休中のいろ〳〵の話と同樣、人により取扱ひ方も異り、內容も種々考へられませう。それだけに各自の力に俟つところが多いと思ひます。語り合ひの形にして幼兒と共に話し合ひ、聞きあひつゝ、先生が筋をたてゝまとめてゆく方法、或は先生が創作され、お話として聞かせる方法等、既に皆樣が試みて居られることゝ存じます。幼兒が自然界からより多くのものを、より豐かに享け得るやうに、幼兒の眼を正しく、深く導き育てる爲に、觀察、手技等と竝んでお話にかけられる期待は大きいのではないかと思ひます。